

「太邇波」考

三好博喜

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

「太邇波」考

三好博喜

1. はじめに

日本の古代地名には、表記と音韻の間に複雑な関係が存在する。特に、撥音〔ん〕の表記が未確立であった奈良時代以前の資料においては、地名の訓読に揺れが見られることが多い。例えば、丹波(たんば)や難波(なにわ)といった地名は、文献によって異なる表記が用いられており、その音韻的読みとの対応関係は一様ではない。このような表記の揺れは、単なる書写上の誤りや加筆・地域差にとどまらず、当時の音韻意識や表記体系の変遷を反映している可能性がある。

本稿では、丹波・難波という古代地名を対象に、表記と音韻の関係性を明らかにする。特に、撥音〔ん〕の音韻的認識が地名表記にどのように反映されたかを検討し、『和名類聚抄』における「太邇波」の訓が「たには・たんば」のいずれなのかの根拠を提示することを目指す。分析に用いる資料は、木簡資料(出土木簡)・古代文献(『古事記』『日本書紀』『和名類聚抄』など)・辞書の資料(『新撰字鏡』『類聚名義抄』など)・平安期文学作品(『栄華物語』『うつほ物語』など)である。これらの資料を横断的に分析することで、表記の揺れと音韻の一致・不一致を検討し、地名訓読の妥当性を論じる。

2. 撥音〔ん〕の表記史と音韻的認識

撥音〔ん〕は、現代日本語では日常的に使用される音素である。その表記が定着するまでには長い時間を要した。音としての撥音〔ん〕は古代から存在していたと考えられるが、文字としての撥音〔ん〕が登場するのは平安時代後期の11世紀後半以降である。それ以前の文献では、撥音〔ん〕を直接表わす文字が存在しなかったため、様々な工夫がなされていた。紀貫之による『土佐日記』(承平5(935)年頃成立)では、「天気(てんき)」を「てけ」「ていけ」と表記しており、撥音〔ん〕を省略したり、他の音に置き換えたりする例が確認できる。これは、当時の表記体系が音韻を完全に反映できていないことを示している。また、万葉仮名においても、撥音〔ん〕を表わすために複数の漢字を用いる工夫が見られるが、明確に撥音〔ん〕を示す文字は存在しない。したがって、音韻的には存在していたはずの

撥音〔ん〕が、表記上は曖昧となる。^(註1)

また、和名類聚抄巻14調度部第22澡浴具第181に『匱』とあり、『説文云匱〔移爾反一音移和名波邇佐布〕柄中有道可以注水之器也俗用椽字所出未詳但和名之義或説云有柄半挿其内故呼為半挿也』と説明している。すなわち、匱(イ)＝波邇佐布＝半挿である。半挿を「はに・そう」と読むには無理があり、「はん・そう」と読むべきであろう。『類聚名義抄』には「ハンサフ」とある。したがって波邇佐布は「はんさふ」＝「はんぞう」と理解できる。考古学では「はぞう・はそう」と呼ぶ器種として馴染み深い。

撥音〔ん〕の音は、古代から存在していたと思われるが、表記としての撥音〔ん〕が登場するのは平安後期以降である。それ以前の文献では、撥音〔ん〕を省略したり、他の音に置き換えたりする工夫がなされた。仮名の使用によって、撥音〔ん〕を表記する意識が徐々に高まり、音韻と表記の一致が進む。このような音韻意識の変化は、地名表記にも大きな影響を与えており、特に丹波のように撥音〔ん〕を含む地名においては、表記の揺れが音韻的認識の反映として現われている。

3. 古代文献・木簡における丹波・難波の表記

古代の地名表記は、音韻と文字の関係が未確立だったため、表記に揺れが生じることが多い。特に撥音〔ん〕を含む地名では、音としての存在が認識されていたにもかかわらず、表記上は省略や置換が行われていた。ここでは、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの文献資料と出土木簡をもとに、丹波・難波の表記の実態を検討し、撥音〔ん〕の音韻的認識と表記の関係を考察する。

『古事記』（和銅5(712)年成立）は、現存する日本最古の書物であり、古代の地名表記を知るうえで貴重な資料である。丹波表記は5例（丹波比古多多須美知能宇斯王、丹波之河上之摩須郎女など）、且波表記は5例（且波之大縣主、且波國など）ある。丹波と且波が併用されており、表記に揺れが見られるが、音韻的にはいずれも「たんば」と読むことが可能である。難波表記は14例、那爾波表記が1例ある。難波は安定して「なには」と読む表記が多く、撥音〔ん〕を必要としないため、表記の揺れは限定的である。

『日本書紀』（養老4(720)年成立）は、最古の正史として編纂された文献であり、表記の統一性が高い。丹波表記が22例、難波表記が117例ある。すべて漢字2文字で、『古事記』に比べて表記が統一されている。丹波では且波などの揺れが見られない。これは、正史としての記録性を重視した結果と考えられている。

8世紀末に成立した『万葉集』は、万葉仮名を用いた和歌集であり、音韻意識が強く反映された表記が特徴である。丹波表記は作者名として丹波大女娘子がある。また、舟波道

は丹波道の誤記とされる。難波表記は31例あり、名庭も1例ある。万葉仮名による3文字表記では奈尔波8例、那尔波1例がある。難波は「なには」と読む音韻が安定しており、万葉仮名による3文字表記もそれを忠実に反映している。一方、丹波には3文字表記が見られず、音韻としての「たんば」が表記に反映されていない点が注目される。

木簡は当時の実用的な記録媒体であり、表記の実態を知るうえで重要な考古資料である。^(注2) 丹波表記が66点(藤原京跡・平城宮跡など)、但波表記が4点(石神遺跡など)、且波表記が10点(藤原宮跡など)ある。一方、難波表記は漢字2文字の17点に加え、万葉仮名による3文字表記が奈迩波・奈仁波・那尔波・奈尔波など計11点ある。丹波は表記に揺れがあるものの、3文字表記は確認されておらず、音韻的には「たんば」と読む意識があったと考えられる。難波は「難波津の歌」の習書木簡として広く流布しており、音韻と表記が一致している。

丹波と難波の表記を比較すると、表記の違いと音韻的背景に以下のような特徴が見られる。丹波は[丹・但・且]などの揺れがあるが、いずれも[tan]の音を含む。加えて、3文字表記が見られず、撥音[ん]の表記が未確立であったことを示す。これに対し、難波は「なには」と読む音韻が安定しており、表記の揺れが少ない。かつ万葉仮名による3文字表記が多く、音韻意識が早期に表記に反映されていた。このように、古代文献および木簡における表記の実態は、撥音[ん]の音韻的認識が地名表記にどのように影響したかを示す重要な資料である。

4. 和名類聚抄における「丹」の地名分類

『和名類聚抄』は、平安時代中期の承平(931~938)年間に源順によって編纂された辞書的文献であり、古代律令制に基づく国郡郷の名称とその訓を記した重要な資料である。以下では、「丹」の文字を含む地名に注目し、それらの訓を分類・分析することで、丹波の音韻的特性と撥音[ん]の存在を検証する。ここでは、『和名類聚抄』20巻本の古活字本を基に、「丹」の文字を含む地名を抽出し、訓の有無・音韻的特徴に基づいて以下の4分類に整理した。^(注3)

- ①【丹波】 1~4、本来の丹波国の範囲である。和銅6(713)年に丹波国11郡の内、北部5郡を割いて丹後国が設置された。したがって、丹波郡は丹波国丹波郡である。丹波郡には丹波郷があり、ここが丹波の中心地とされている。丹波国・丹後国に訓があり、それぞれ太邇波・太邇波乃美知乃之利である。17、陸奥国白河郡にも丹波郷があるが訓を欠いている。
- ②【丹生】 5・6、越前国に丹生郡丹生郷があり、丹生郡に爾不の訓がある。12、伊勢国

表1 「丹」を用いた国群郷一覧表

No.	国名	郡名	郷名	訓	備考
1	丹波国	—	—	太邇波	
2	丹後国	—	—	太邇波乃美知乃之利	
3	丹後国	丹波郡	—		
4	丹後国	丹波郡	丹波郷		高山寺本・刊本とも訓を欠く。
5	越前国	丹生郡	—	爾不	刊本「爾不」、東急本「尔布」。
6	越前国	丹生郡	丹生郷		高山寺本「邇布」
7	河内国	丹比郡	—	太知比為丹南為丹北	高山寺本「タチヒ」、東急本「太知比」。
8	河内国	丹北郡	丹上郷		諸本ともに訓を欠く。
9	河内国	丹北郡	丹下郷		諸本ともに訓を欠く。
10	尾張国	丹羽郡	—	邇波	
11	尾張国	丹羽郡	丹羽郷		高山寺本・東急本・元和古活字本のいずれも訓を欠く
12	伊勢国	飯高郡	丹生郷	爾布	高山寺本「迺布」、東急本は「尔布」。
13	武蔵国	秩父郡	丹田郷		同書高山寺本・東急本・古活字本「丹田」、名博本「舟田」。訓を欠く。
14	近江国	坂田郡	上丹郷	加無都爾布	高山寺本「加无津迺布」、東急本「加无都尔布」。
15	上野国	甘楽郡	丹生郷		高山寺本・東急本ともに訓を欠く。
16	常陸国	新治郡	月波郷	都木波	高山寺本「丹波」訓「豆支波」、東急本・刊本「月波」訓「都木波」。
17	陸奥国	白河郡	丹波郷		訓を欠く。
18	若狭国	遠敷郡	丹生郷	爾布	高山寺本「迺布」、東急本「尔布」。
19	因幡国	八上郡	丹比郷		諸本とも訓を欠く。
20	備中国	英賀郡	丹部郷	多知倍	高山寺本「多知閉」、東急本「多知倍」。
21	安芸国	高宮郡	丹比郷	多無比	高山寺本「多知比」、東急本「多无比」。
22	伊予国	新居郡	丹上郷		高山寺本「井上」訓「為乃倍」、流布本「丹上」訓を欠く。
23	土佐国	安芸郡	丹生郷	爾布	東急本「尔布」。
24	豊後国	海部郡	丹生郷		道円本・高山寺本・東急本ともに丹生とあり、訓はない。

(元和古活字那波道圓本を基に作成)

飯高郡に丹生郷があり、爾布の訓がある。15、上野国甘楽郡に丹生郷があり、訓はない。18、若狭国遠敷郡に丹生郷があり、爾布の訓がある。23、土佐国安芸郡に丹生郷があり、爾布の訓がある。24、豊後国海部郡に丹生郷があり、訓はない。14、近江国坂田郡に上丹郷があり、加無都爾布の訓がある。

- ③【丹羽】 10・11、尾張国に丹羽郡丹羽郷があり、丹羽郡に邇波の訓がある。
- ④【丹比】 7・8・9、河内国丹比郡に丹上郷・丹下郷がある。丹比郡に太知比の訓がある。郷名に訓はない。19、因幡国八上郡に丹比郷があり、訓はない。20、備中国英賀郡に丹部郷があり、多知倍の訓がある。高山寺本は多知閉、東急本は多知倍とする。21、安芸国高宮郡に丹比郷があり、多無比の訓がある。高山寺本は多知比・東急本は多无比とする。多比郡は古代豪族多治比氏の本拠地である。丹治比・丹治・丹比・丹墀などとも書く。
- ⑤【誤記・不明】 16、高山寺本に常陸国新治郡丹波郷があり、豆支波の訓がある。東急本・刊本には月波郷とあり都木波」の訓がある。訓から丹波は月波の誤記である。22、刊本に伊予国新居郡丹上郷があり、訓を欠く。高山寺本には井上郷とあり、為乃倍の訓がある。13、高山寺本・東急本・古活字本には丹田郷とある。名博本には舟田郷とある。い

ずれも訓を欠く。中世丹党の活動した地域であり、多治比氏の伝承をもつ。

以上の分類から丹波の特異性と太邇波の訓について考察する。丹生は全国各地に分布し、訓は爾布・爾不とされる。これらは「にふ・にぶ」と読む音韻で、丹を [ni] と読むため撥音 [ん] は不要である。丹羽は尾張国に見られ、邇波の訓がある。「にわ」と読む音韻であり、これも撥音 [ん] を必要としない。丹比は多治比氏に由来する地名であり、「太知比・多知倍・多无比」などの訓が付される。これは、和銅6(713)年の好字二字令による表記簡略化の影響と考えられ、多治比の3文字表記が2文字に変化したものである。丹比などの地名は、表記簡略化の過程で丹の文字を借用しているが、音韻的には [tan] の音を必要としない。多遅麻・多遅摩を但馬としたのも同様である。一方、丹波は音韻的に [tanba] と読む必要があり、表記簡略化の影響を受けていない点で特異である。このことから、丹波は単なる表記の結果ではなく、音韻的に撥音 [ん] を含む地名として認識されていたと考えられる。

『和名類聚抄』における「丹」の地名分類を通じて、丹波が他の「丹」地名とは異なる音韻的性質をもつことが明らかになった。太邇波という訓は、撥音 [ん] を含む音韻を表しており、「丹波=たんば」と読むべき根拠となる。表記簡略化の影響を受けた他の地名と異なり、丹波は音韻の保持を重視した地名であるといえる。

5. 平安期文学作品における表記の実態

平安時代後期は、日本語表記体系が大きく変化した時期である。変体仮名の使用が広まり、音韻意識がより明確に表記に反映されるようになった。ここでは、丹波・難波という地名が平安期の文学作品においてどのように表記されているかを検討し、撥音 [ん] の表記がどの程度定着していたかを明らかにする。^(註4)

うつほ物語 10世紀後半の成立とされ、源順を作者とする説が有力である。古活字本・写本46冊で確認した。18系統に分かれる。丹波は3か所に現われる。漢字表記が多く、変体仮名3文字で表わす場合は多くが [ん] を挟む(堂ん者・太ん者・多ん者・多ん八)。太武者とするものもある。変体仮名2文字(多尔・太尔・多仁・太丹)の箇所は、「近江・丹波」と読解されるが、丹波とするには検討が必要である。難波は7か所に現われ、漢字もしくは変体仮名3文字で表わされる(奈仁者・奈仁八・奈丹者・奈尔八・奈尔者・奈耳者)。^[ん] を挟む表記はない。

栄華物語 正編30巻は11世紀前半、続編10巻は12世紀初頭の成立とされる。古活字本・写本25冊で確認した。16系統に分かれる。丹波は13か所に現われる。丹波で表わす箇所が多いが、変体仮名で [ん] を挟むものも多い(多ん者・多ん者ゝ・多ん八・多ん八ゝ・堂

ん者)。太武者・太武者^ゝとするものもある。八番目に現われる『丹波中将の君』の箇所は変体仮名2文字で表わされる比率が極めて高い(太者・太者^ゝ・多者)。「ん」の省略形である。堂八・多八の表記もある。難波は7か所に現われ、漢字もしくは変体仮名で表わされる(奈仁者・奈仁八・奈丹者・奈尔八・奈尔者・奈耳者)。「ん」を挟む表記はない。

大鏡 11世紀後半から12世紀前半の成立と見る説が多い。古活字本・写本18冊で確認した。12系統に分かれる。丹波は1か所に現われる。丹波が多く、「ん」を省略した変体仮名2文字表記の箇所もある(多者・多者^ゝ・太八)。難波は2か所に現われ、漢字もしくは変体仮名で表わされる(奈尔者・奈尔八・奈仁者・奈仁八・奈丹八)。「ん」を挟む表記は見られない。変体仮名奈八で記すものもあるが、「なには」の「に」の欠字とされる。

落窪物語 10世紀末ごろ書かれたとされる。古活字本・写本25冊で確認した。丹波は1か所に現われるだけだが、6系統に分かれる。丹波や変体仮名で「ん」を挟む(太ん者)、「ん」を省略した変体仮名(多者・太者^ゝ・堂者)で表記される。

紫式部日記 11世紀初頭、紫式部が中宮彰子へ宮仕えした時の日記である。古活字本・写本15冊で確認した。丹波は2か所に現われ、8系統に分かれる。最初に現われる箇所は丹波や変体仮名2文字(太者・多者^ゝ・多者^ゝ)で表わす。次に現われる箇所は変体仮名で「ん」を挟む(多ん者・太ん者^ゝ・堂ん者・堂ん者^ゝ)で表わす。

夜の寢覚 11世紀後半に成立した王朝物語で、菅原孝標女を作者とする説が有力である。写本3冊で確認した。丹波は2か所に現われ、2系統に分かれる。変体仮名で「ん」を挟み表わす(堂ん者・多ん者)。

伊勢物語 作者は未詳。9世紀末～10世紀前半ころ成立し、11世紀以後に大幅な増補がなされた。初期仮名文学の代表作である。古活字本・写本86冊で確認した。難波は2か所に現われるだけだが、24系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔波・奈尔八・奈仁者・奈仁八・奈丹者・奈耳者・那耳者)で表わされる。

竹取物語 9世紀後半から10世紀の初めの成立とみられる。古活字本・写本21冊で確認した。難波は5か所に現われ、8系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔波・奈尔八・奈仁者・奈仁八)で表わされる。

土佐日記 承平5(935)年ころ紀貫之が記した日記文学である。古活字本・写本30冊で確認した。難波は2か所に現われるだけだが、13系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔波・奈尔八・奈尔盤・奈仁者・奈仁波)で表わされる。

大和物語 10世紀半ばに成立後、11世紀初頭までに加筆増補されている。古活字本・写本18冊で確認した。難波は5か所に現われ、15系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔八・奈尔和・奈仁者・奈仁八・奈丹者)、「に」を欠字にした変体仮名(奈者)で表わす。

表2 平安期文学にみる「丹波」「難波」一覧表

栄華物語

Table with columns for chapters (4, 5, 12, 31, 36, 38) and characters (A-P). Rows list various locations and characters like 見はてめ夢, 浦々のわかれ, 玉の村菊, etc.

うつほ物語

Table with columns for chapters (1, 2, 3) and characters (A-Q). Rows list locations like ①丹波に, ②丹波守, ③あふみにた.

大鏡

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-L). Rows list locations like ①丹波守, ①難波津, ②難波の.

夜の寝覚

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-B). Rows list locations like ①丹波の守, ②丹波の乳母.

紫式部日記

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-H). Rows list locations like ①丹波の守, ②丹波の守.

源氏物語

Table with columns for chapters (1-8) and characters (A-D). Rows list locations like ①難波津, ②難波の方, ③難波に, etc.

落窪物語

Table with columns for chapters (1) and characters (A-F). Row lists location ①丹波の庄.

紫式部集

Table with columns for chapters (1) and characters (A-E). Row lists location ①難波高.

竹取物語

Table with columns for chapters (1-5) and characters (A-H). Rows list locations like ①難波まで, ②難波に, ③難波より, etc.

伊勢物語

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-X). Rows list locations like ①難波の方, ②難波津.

枕草子

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-N). Rows list locations like ①難波津, ②難波わたり.

平中物語

Table with columns for chapters (1-6) and character (A). Rows list locations like ①難波の方, ②難波高, ③難波の高, etc.

大和物語

Table with columns for chapters (1-5) and characters (A-O). Rows list locations like ①難波の, ②難波に, ③難波に, etc.

土佐日記

Table with columns for chapters (1, 2) and characters (A-M). Rows list locations like ①難波に, ②難波高.

平中物語 作者は不明。10世紀半ばごろに成立したと思われる。写本1冊で確認した。難波は6か所に現われ、変体仮名(奈尔波・奈尔八)で表わされる。

枕草子 作者は清少納言。10世紀末から11世紀初頭に成立した。古活字本・写本37冊で確認した。難波は2か所に現われ、14系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔八・奈仁者・奈仁八・奈丹者・那尔者・那丹者)で表わされる。

源氏物語 紫式部が記した長編小説。成立年代は未詳で、文献初出は11世紀初頭とされる。写本4冊で確認した。難波は8か所に現われ、4系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔八・奈仁者・奈仁八・奈丹八・奈耳八)で表わされる。

紫式部集 紫式部が生涯に詠んだ和歌を集めた私家集である。11世紀初頭ころか。写本13冊で確認した。難波は1か所に現われるだけだが、文字遣いから5系統に分かれる。難波や変体仮名(奈尔者・奈尔波・奈仁者・奈丹者)で表わされる。

以上の分析から丹波・難波の表記傾向を探る。

丹波は、平安期文学作品において多様な表記で登場する。『うつほ物語』『栄華物語』『紫式部日記』『落窪物語』『夜の寝覚』などの作品群を調査した結果、次のような傾向が確認された。漢字表記では丹波の表記が最も一般的である。変体仮名表記では、多ん者・太ん者・堂ん者など、撥音〔ん〕を中間に挟む表記が多く確認される。これは「たんば」と読む音韻意識が強く反映されたものである。変体仮名2文字表記の多者・太者・堂者などは、撥音〔ん〕を省略した形で、音韻的には「たんば」と読むべきものである。例外的表記として「たに」と読める表記(多尔・太尔など)がわずかに確認されるが、文脈上丹波と断定するには慎重な検討が必要である。これらの表記から、丹波という地名は音韻的に「たんば」として認識されており、撥音〔ん〕の表記が徐々に定着しつつあることがうかがえる。

難波については、『伊勢物語』『竹取物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部集』などの作品を対象に調査を行った。漢字表記では難波の表記が主流であり、地名としての使用が安定している。変体仮名表記の奈尔者・奈仁者・奈丹者・奈耳者など、「なには」と読む音韻を忠実に反映した表記が多く確認される。変体仮名2文字表記の奈者など、「に」を欠いた形も一部に見られるが、これは欠字と考えられる。難波に関しては、撥音〔ん〕を挟む表記は確認されておらず、音韻的に「なには」として安定している。難波の表記は、丹波に比べて揺れが少なく、音韻と表記の一致が早期に達成されていたと考えられる。

6. 表記と音韻の関係性

表記の揺れと音韻の一致・不一致を比較することで、撥音〔ん〕の音韻的認識が地名表

表3 平安期文学にみる変体仮名「丹波」の一覧

うつほ物語	A	B	C	D	E	F	G	H	I	K	K	K	L	L	L	L	L	M	N	O	P	Q
	①	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	但馬	但馬
②	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
③	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波

栄華物語	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
	①	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	②	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	③	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	④	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑤	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑥	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑦	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑧	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑨	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑩	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑪	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
	⑫	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波
⑬	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	—	丹波	丹波	丹波	丹波	

紫式部日記	A	B	C	C	C	D	E	F	G	H
	①	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
②	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波

夜の寝覚	A	A	B
	①	丹波	丹波
②	丹波	丹波	—

落窪物語	B	B	B	B	B	B
	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波
D	D	D	D	D	E	F
	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波

大鏡	H	I	I	I	J	K
	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波	丹波

記にどのように反映されたかを明らかにし、「太邇波=たんば」と読むべき根拠を論じる。

丹波は『古事記』や木簡で丹波・但波・且波と揺れるが、音韻的には一貫して「たんば」と読むことが可能である。難波は難波・奈尔波・奈仁者などの表記があるが、すべて「なには」と読む音韻を保っており、撥音[ん]を必要としない。この比較から、丹波は表記の揺れが音韻の補完を目的としていた可能性が高く、難波は音韻と表記が早期に一致していたと考えられる。

平安期文学作品において、丹波は変体仮名3文字で多ん者・太ん者などと表記する例が多く、撥音[ん]が音韻的に必要とされていたことが示される。一方、難波には撥音[ん]を挟む表記は見られず、音韻的に「なには」として安定していた。また、変体仮名二文字で多者・太者などと表記する丹波は、撥音[ん]の省略形と解釈でき、音韻的には「たんば」に一致する。これらの表記は、撥音[ん]が音として認識されていたが、表記として定着途上であったことを示している。

『和名類聚抄』における丹波の訓「太邇波」は、撥音〔ん〕を含む音韻を表しているといえる。邇は通常「に」と読むが、文脈によって撥音〔ん〕を担う可能性がある。これは波邇佐布が「はんさふ=はんぞう」と読まれる例からも、邇が撥音〔ん〕を含む音韻を表わすことが可能である。太邇波は「たにわ」ではなく「たんば」と読むべきであり、撥音〔ん〕の音韻意識が訓に反映された例といえる。この訓は、表記上撥音〔ん〕の文字が存在しない時代において、撥音〔ん〕を音韻的に表現しようとした工夫の一例であり、音韻と表記の接点として極めて重要である。

好字二字令により地名表記の簡略化が進められたが、丹波はその影響を受けなかったと考えられる。丹比は多治比からの簡略化であり、丹の文字を借用しているが、音韻的には〔tan〕を必要としない。丹波は音韻的に〔tanba〕と読む必要があり、表記簡略化の影響を受けず、音韻保持が優先された地名である。この点からも丹波は撥音〔ん〕を含む音韻が不可欠であり、表記の揺れはその音をどう表わすかに起因している。

7. おわりに

丹波と難波の表記と音韻の関係を総合的に検討した結果、以下の点が明らかとなった。

難波は「なには」と読む音韻が安定しており、撥音〔ん〕を必要としないため、表記の揺れが少ない。丹波は音韻的に撥音〔ん〕を含む「たんば」と読む必要があり、表記の揺れはその音韻を補完する工夫であった。『和名類聚抄』の太邇波という訓は、撥音〔ん〕の音韻意識を反映した表記であり、「たんば」と読むべき根拠となる。丹波は表記簡略化の影響を受けず、音韻保持が優先された特異な地名であり、成立当初から「たんば」と理解すべき地域である。

以上の考察により、「太邇波=たんば」と読むべきであるという結論は、文献的・音韻的・表記史的に十分な根拠をもつといえる。地名は、時代の言語感覚と表記技術の交差点に位置するものであり、その訓読をめぐる議論は、言語史の核心に触れる営みである。「太邇波=たんば」と読むべきであるという結論は、単なる訓読の修正にとどまらず、古代日本語の音韻意識と表記体系の関係を再考する契機となるものである。

(みよし・ひろき=当調査研究センター調査課副主査)

注1 山口諤司2010『ん 日本語最後の謎に挑む』新潮新書

注2 (独法)国立文化財機構奈良文化財研究所の運営する木簡庫での検索結果(2025.08)。

(<https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/>)

注3 京都大学文学部国語学文学研究室編1968『諸本集成 和名類聚抄 本文篇』臨川書店

注4 WEB上で閲覧可能な下記「閲覧文献請求記号」による資料を使用した(“=アルファベット”は

一覧表に対応)。

閲覧文献請求記号：

【栄華物語】 学習院大学文学部日本語日本文学研究室 :216-143-1=K, 関西大学図書館 ;DIG-KANS-54-E=M, 京都大学附属図書館 ;5-6 1=1=L, 国文学研究資料館 ;89-297-1 ~ 17=C/98-990-1 ~ 5=M, 国立国会図書館 ;857-20=L/WA7-106=B/ 同 125=B/ 同 126=B/ 同 148=B/ 同 283=B/ 寄別 13-24=I/ 本別 12-2=D, 盛岡市中央公民館 ;281-334-2=G/281-339-2=F, 早稲田大学図書館 ;リ 501098=A/リ 506661=L/ 文庫 30E121=J/ 同 122=E/ 同 123=E/ 同 127=L, 筑波大学附属図書館 ;6-48-1=P/6-50-1=H, 名古屋大学附属図書館 ;8-1-7=O/DIG-NAGO-10297=N.

【うつほ物語】 宮内庁書陵部 :20-566-4=J/20-568-4=E/20-578-6=J/20-585-2=H/20-587-3=Q/20-782-1=P, 京都大学附属図書館 ;4-30 1 貴 (近衛文庫) =I, 4-30 1 貴 (一般貴重書) =L, 九州大学中央図書館 ;15-33-16=R, 九州大学附属図書館 ;萩野文庫 11=K/545 1 3=C, 国文学研究資料館 ;12-446=R/93-19=L/93-20=K/93-21=R/96-749=R/99-181=L/99-143-1 ~ 5=L, 国立国会図書館 ;830-107=C/ 寄別 5-4-1-1 (1-10) 同 2-1 (11-20) =G/857-8=B/ は -17=C/ ほ -5=O, 実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館 ;DIG-JWUL-177=J/ 同 180=F, 早稲田大学図書館 ;^ 1204327=C/^ 1204351=L/ 文庫 30C46=D/ 同 47=C/ 同 48=C/ 同 49=R/ 同 50=N/ 同 51=K/ 同 52=L/ 同 53=L/ 同 54=K/ 同 55=R/ 同 56=R/ 同 57=R/ 同 58=R/ 同 59=R, 大阪府立中之島図書館 ;66-9-2=R, 島根大学附属図書館 ;215-12-6=R, 東京大学総合図書館 ;2-6-2=A, 東京大学文学部国文学研究室 ;4-3-6=K, 肥前島原松平文庫 ;358-4-4=M.

【大鏡】 茨城県立歴史館 ;298-6-3=I, 関西大学図書館 ;DIG-KANS-102-E=G, 宮内庁書陵部 ;DIG-KSRM-251102=F/ 同 376704=C/ 同 647101=K/ 同 647102=D/ 同 647202=B, 京都大学附属図書館 ;5-6 1 貴 =E, 国文学研究資料館 ;# 4-90=J, 国立公文書館 ;19-41-5=J/19-44-3=L, 国立国会図書館 ;WA7-205=J/ 本別 4-29=B, 盛岡市中央公民館 ;281-525-2=I, 早稲田大学図書館 ;リ 500299=A/リ 512897=H/ 文庫 30E128=I, 名古屋大学附属図書館 ;8-2-3=A.

【紫式部日記】 宮内庁書陵部 :20-462-14=H/ 同 15=A/20-463-3=C, 国文学研究資料館 ;# 0-82-7=E, 早稲田大学図書館 ;文庫 30A368=G/ 文庫 30E23=D/ 同 24=C/ 同 25=F/ 同 26=F/ 同 28=F/ 同 29=F/ 同 30=B/ 同 34=B, 白百合女子大学図書館 ;76-49-4=F, 肥前島原松平文庫 ;358-70-2=C. 【夜の寝覚】 宮内庁書陵部 ;20-439-9=B, 実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館 ;DIG-JWUL-268=A, 肥前島原松平文庫 ;358-37-3=A.

【落窪物語】 関西大学図書館 ;DIG-KANS-143=D, 宮内庁書陵部 ;20-788-10=D, 京都市歴史資料館 ;DIG-KTRS-30=C, 京都大学附属図書館 ;4-30 1 貴 (近衛文庫) =C/4-30 1 貴 (谷村文庫) =E/DIG-KYOT-52904=C, 広島大学図書館 ;DIG-HRSM-376=B, 国文学研究資料館 ;# 4-94-1 ~ 4=B/93-18-1 ~ 6=B, 国立国会図書館 ;857-145=D, 早稲田大学図書館 ;文庫 30C64=C/ 同 65=B/ 同 66=A/ 同 67=A/ 同 68=A/ 同 69=A, 相愛大学図書館 ;397-26-2=D, 丹波篠山市教育委員会 ;339-74-4=B, 筑波大学附属図書館 ;6-24-3=A, 東京大学総合図書館 ;2-18-5=D, 東京大学文学部国文学研究室 ;4-46-4=B, 東京都立中央図書館 ;270-26-2=C, 八戸市立図書館 ;96-113-2=B, 北海道大学附属図書館 ;DIG-HOKU-69=C, 名古屋大学附属図書館 ;7-21-2=F.

【伊勢物語】 関西大学図書館 ;DIG-KANS-10008=L/ 同 10021=I/ 同 10017=M, 広島大学図書館 ;DIG-HRSM-359=J/ 同 360=I/ 同 355=G, 国文学研究資料館 ;12-396=G/12-397=Q/12-401=K/93-9=G/98-107=F/98-122=L/98-128=G/98-133=A/98 - 136=Q/98-141=F/98-145=X/98-170=M/98-230=M/98-240=F/98-245=U/98-246=J/98-247=F/98-25=G/98-252=C/98-288=H/98-289=U/98-296=F/98-302=I/98-311=Q/98-321=Q/98-322=L/98-328=T/98-338=N/98-341=F/98-349=R/98-353-1 ~ 2=D/98-357=H/98-362=G/98-369=G/98-38=V/98-381=D/98-41=Q/98-42=E/98-63=P/98-69=G/98-70-1 ~

2=F/98-78=G/98-84=A/98-9=G/98-91=G/98-92=G/98-94=B/98-95=P/98-97=G/98-99=G/ ㊦ 1-141=F, 国立国会図書館; に 44=N/WA16-29=O/ 同 160=A/WA7-238=W/ 同 27=W/ 同 28=W/WB1-21=W/ い 77=W, 東海大学付属図書館; DIG-TKAL-10=N/ 同 13=V/ 同 14=N/ 同 15=L/ 同 16=J/ 同 17=G/ 同 21=M/ 同 23=A/ 同 25=A/ 同 26=A/ 同 28=M/ 同 29=G/ 同 30=O/ 同 31=F/ 同 32=A/ 同 33=F/ 同 34=G/ 同 35=L/ 同 8=L/ 同 9=S, 名古屋大学附属図書館; DIG-NAGO-10294=G.

【源氏物語】 京都大学附属図書館; DIG-KYOT-53566=C, 国文学研究資料館; ♯ 4-98-1 ~ 54=D, 国立国会図書館; WA21-26=A/ 貴 7-55=B.

【紫式部集】 宮内庁書陵部; 20-14-11=C/20-27-15=A/20-36-3=C=A/20-43-9=B/20-50-6=E, 高知県立高知城歴史博物館; ♯ 911 - 82=B, 国文学研究資料館; 7 2-33-6=A/ ♯ 2-56=A, 東京大学文学部国文学研究室; 4-58-11A, 肥前島原松平文庫; 358-138-15=A/ 同 16=A, 兵庫県立篠山鳳鳴高等学校; 69-22-3=D, 祐徳稲荷神社; 1 1-45-1=A.

【大和物語】 愛媛大学図書館; DIG-EMSK-2=C, 安田女子大学図書館; DIG-YSDI-62=D/ 同 63=E, 宮内庁書陵部; DIG-KSRM-695604=L, 京都大学附属図書館; 4-30 ♯ 1 貴 =E, 九州大学中央図書館; 15-24-4=I, 熊本大学附属図書館; 224-2-2=B, 広島大学図書館; DIG-HRSM-382=M, 国文学研究資料館; 93-14-1 ~ 2=H, 国立国会図書館; 854-208=O/913.33-y=J/WB36-1=N, 筑波大学附属図書館; 6-24-2=D/6-253-1=G, 東海大学付属図書館; DIG-TKAL-55=F, 東京大学文学部国文学研究室; 4-67-7=A, 東京都立中央図書館; 270-22-1=A, 肥前島原松平文庫; 358-4-2=K.

【竹取物語】 九州大学中央図書館; 250-18-2=B, 九州大学文学部; 47-12-9=B, 熊本大学附属図書館; 224-83-6=B, 広島大学図書館; DIG-HRSM-364=A/ 同 365=B, 国文学研究資料館; 93-1=A/ ♯ 4-110=B/ ♯ 4-51-1 ~ 2=B, 国立公文書館; 19-1-1=H/ 同 2=B, 国立国会図書館; WA7-195=A/ 本別 12-3 絵巻 =G, 盛岡市中央公民館; 281-327-2=B, 筑波大学附属図書館; 6-22-7=A, 東海大学付属図書館; DIG-TKAL-1=A, 東京大学文学部国文学研究室; 4-45-6=C/4-67-3=E/ 同 4=D, 名古屋大学附属図書館; DIG-NAGO-927=B/ 同 1122=F/9-29-2=A.

【土佐日記】 愛媛大学図書館; DIG-EMSK-790=A/ 同 791=F, 宮内庁書陵部; 20-458-2=J/ 同 3=A/ 同 4=A/ 同 10=B/DIG-KSRM-265808=A, 広島大学図書館; DIG-HRSM-410=L, 弘前市立弘前図書館; 272-195-6=B/272-97-5=A, 国文学研究資料館; 12-371=L/12-373=M/12-374=E/12-381=D/ ♯ 5-19=A/ ♯ 5-26=C/ ♯ 0-82-4=G, 国立国会図書館; 915.32-t-i=H, 盛岡市中央公民館; 281-382-2=B, 早稲田大学図書館; 文庫 30_E1=H/ 同 _E2=A/ 同 _E4=B/ 同 _E9=H/ 同 _E11=B/ 同 _E12=B, 東奥義塾高等学校; 67-3-7=H, 東京大学総合図書館; 2-44-3=A, 東京藝術大学附属図書館; DIG-TKGL-11209=K, 肥前島原松平文庫; 358-69-3=D/ 同 4=A.

【平中物語】 国文学研究資料館; 93-17=A.

【枕草紙】 宇和島伊達文化保存会; DIG-UWJM-108=D, 岩手県立図書館; 336-5-1=D, 宮内庁書陵部; 20-457-1=K/20-809-5=L, 京都大学附属図書館; 4-30 ♯ 1 貴 =I, 広島大学図書館; DIG-HRSM-399=G, 国文学研究資料館; 12-463-1 ~ 3=L/12-464=I/15-580-1 ~ 3=I/ ♯ 5-23-1 ~ 7=D, 国立国会図書館; WA7-84=C/ 同 141=C, 実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館; DIG-JWUL-201=D, 早稲田大学図書館; 文庫 30E91=C/ 同 92=C, 相愛大学図書館; 397-1-1=D/ 同 2=D/397-3-1=N/ 同 3=G/397-4-4=F/397-6-1=B/ 同 2=C/397-9-1=G/397-23-3=C/DIG-SOAI-1=D/ 同 2=E/ 同 3=F/ 同 4=C/ 同 10=M/ 同 42=D/ 同 43=N/ 同 44=F/ 同 45=D/ 同 46=G, 大阪公立大学中百舌鳥図書館; 244-20-1=H, 筑波大学附属図書館; 6-72-3=J, 富山市立図書館; DIG-TYMY-803=D.